

地誌学への一つの視点

大 嶽 幸 彦

要 旨

地誌学の定義づけは難しいが、一言でいえば、ある土地の人々の生活や気候、地形、産業等を学ぶことである。一般地理学の研究は進んでおり、細分化されているが、わが国では地誌学に対する理解がうすく、比較的研究の細分化が進んでいない。世界の地理学界では「地誌」を書くことが、地理学者のライフワークという考えをもつ人も多い。

ところで、地理はわからなくとも、外国を知ろうという人が多い。それは、1) 国は他国との関係で成り立っている。2) 外国へ行く機会が日常化、大衆化している。3) 海外勤務が中小企業にまで広まっている、などのことから、a) 世界には様々な価値観が存在し、それぞれ体系をもっている。b) 国際感覚を身につける必要がある。c) 地域という概念を更に深める必要がある。以上の3点が地誌学のレゾン・デートルである。地誌学の応用に関しては、次の3点が考えられる。

1) 自然風土の研究に際し、景観、環境、地域構成要素を知る手がかりとして必要である。

2) 異文化理解への貢献である。国際化時代になっても、人間は風土の申し子ともいわれ、環境の影響は否定しえない。

3) Espace vécu (生きられる空間) の概念が地域の考察に有効である。Espace vécu とは現象学に基づき、ある人の距離と時間を考慮に入れた、日常の活動範囲である。

地誌学は様々な分野で利用されており、地域の様々な現象に関係しているのである。

目 次

I はじめに

I-1 地理学における地誌学の地位

——系統地理学との関連において——

I-2 国際化時代の地誌学と地理教育

II 地誌学の応用

II-1 自然風土

II-2 異文化理解への貢献

II-3 Espace vécu (生きられる空間) の概念

III 結 び

I はじめに

衆知の如く、地理学は大きく分けて一般地理学（系統地理学）と地誌学（地域地理学）の2部門から構成されるが、わが国では地誌学研究は一般地理学研究と比べるとマイナーな部門であり、研究とは見なさない風潮がなくもない¹⁾。筆者は、先に拙著『国際化時代の地理学』で次のように述べたことがある。「地理学の本質については様々な議論もあるし、研究方法も次々に新たなものが導入されてきたが、結局は事象の総合的理解を旨とする地域地理学（地誌学）にあるというのが、大かたの地理学者の了解している点であろう。しかし、個別的な研究の専門化を志向してきた地理学研究者にとって、地域の総合的理解ということは、これまた実に困難な代物である。ある狭い領域の問題について体系化をはかることは比較的容易であるが、ある空間的範囲の地域地理学を体系づけることは至難である。というのも、地域地理学のすべてに通じなければならぬとは広く浅く研究しなければならぬから。これは地理学研究の一般的傾向とは逆の方向である²⁾」。本稿はその後の研究成果を中心に、地誌学の応用に関し若干の提言をし、諸賢の御批判を仰ぐべく草したものである。その前に、地理学における地誌学の地位について論じておかねばなるまい。

I-1 地理学における地誌学の地位——系統地理学との関連において——

地誌学とは何かを論ずるとすれば正に大きなテーマであり、膨大な文献を承合しなければならぬが、本稿のねらいは地誌学の応用面を強調することにあるので、それは別の機会に譲りたい。ただ、地誌学のねらいの一つは、「未知の土地の様子——どんな人々が住んでいるか、どんな生活をしているか、どんな産物があるか、どんな産業があるのか、どんな気候なのか、どんな地形なのか——を知ることは興味深いことである³⁾」という田辺健一の指摘にもある如く、未知の土地と人々への夢なり空想をかきたて、そういった事象を知ったことで心豊かになることにあるように思われる。また、知らない土地へ旅行してみたい、住んでみたいという人間本来の欲求を人々に引き起すことにもあろう。

先に述べた如く、地理学の領域は一般地理学と地誌学から成るが、一般地理学での自然地理学と人文地理学的方法的分離はますます進み、先端的研究での細分化・専門化の著しきはよく知られた事実である。しかも、自然地理学は自然そのものの研究を主体として人間を考慮に入れず、人文地理学は計量的手法にみられる如く、自然的要素を落す傾向にないであろうか。しかしながら、人間にまったくかわりのない純粹自然の研究が、地理学的な環境の研究に果たして役立つものかどうか、考えてみる必要がある⁴⁾。というのも、環境研究が重要なのは、地球上の取返しのつかぬ自然破壊を防ぐために、地理学からも貢献する必要があるためであろうからである。人文地理学における計量的方法については、後に言及したい。

一方、地誌学は日本で研究対象としてとらえられることは比較的少なく、単に教職用地誌の最低2単位を与えるために教えられ、それ用の地誌書が編まれて来た経緯を思い出さなければなるまい。しかし、地誌書とは本来、ある一人の地理学者の到達した地理学観を基に書き上げた、ある地域についての地理思想書であるべきであり、決して多数の人々が項目を分担して書き上げる寄せ集めのたぐいではないと思われる。地理学における地誌学の地位に関し、地誌学を中心に置き、そのまわりに一般地理学の各分野が来て、その外側に隣接科学を配置する考え方については、西川 治⁵⁾、正井泰夫⁶⁾を始めとして地理教育の現場からも様々な案が出されている。しか

し、一般地理学研究の細分化・専門化の一層の進展と共に、地理学の中心から外へ向う強烈な遠心力が働き、地理学はよく言われるような八百屋の学問どころか、チリヂリバラバラ学への崩壊過程にあると言っても過言ではないように思われる。そこで、日本では研究とは見なされにくい地誌学が、果たして地理学建て直しの求心力となり得るかどうかは定かではないが、後にみる如く、地誌学の復活は既に起っているのである。また、「地域地理学（地誌学）の中に、地理学研究の最も完成した形を見続けようとする地理学者は依然として多い。地域地理学においてこそ、自然条件と人間社会との密接な関係が確立しうるし、社会・経済生活の様々な面の相互作用が、住民による空間の具体的な活用の程度の中に見られる⁷⁾」という主張にも耳をかたむけたいと思うのである。本稿で地誌学とその応用を取り上げた意図の一つは、実はこれらの点に注目したこと他にないのである。地誌学は国際化時代の到来と共に、その重要性が見直されて来たと思われるので、次に国際化時代の地誌学と地理教育について論を進めることにしたい。

1-2 国際化時代の地誌学と地理教育

ドイツ地誌学の最近の研究動向をまとめた森川 洋によれば、地誌学に関して伝統を持つドイツにおいても、2つの理由から地誌学のルネッサンスが起っている⁸⁾という。1つは外国について確実に知ろうとする一般市民の要求の高まりが挙げられよう。マスメディアからは絶えず、外国に関する情報が流されているが、不完全のため地理学者による基礎的研究に頼らざるを得ないことである。第2の理由は計量地理学への反動であり、計量地理学の限界がわかり、魅力が薄れてきたことである。地理学においてもコンピューターのお告げに頼ることや、イデオロギーへの逃避が見られる今日、現地での観察こそ地誌学の基本的方法を成すものである。しからば、如何に国際化時代の地誌学と地理教育に取組むべきか。

ところで、国際化時代という言葉はよく使われるようになったが、その定義に関しては寡聞にして知らない。ただ、国際化時代という言葉の中には、およそ3つの内容が含まれているようである。第1に、国家は他国との関係において成立しているものであること、第2に外国へ行く機会が多くの人々にとって日常化していること、第3は中小企業の国際化、海外日本人学校への教諭派遣、国際機関への就業等にみられる如く、日本人による海外勤務の増加であろう。以上のような意味での国際化時代における地誌学、地理教育にとって要請されるものは何か。拙編著『国際理解としての地理学』の序説で議論した⁹⁾点を要約すれば、次の3点に絞られよう。すなわち、世界には、自分と価値体系の違う人びとが大勢いること、そして自分の価値体系、価値判断が必ずしも最高・最善のものではないことを認識することが第1の点である。第2の点は、日本ないし日本人の行動が世界に好かれ悪しかれ大きな影響を与えるようになった点を反省すること、一言でいえば国際感覚を身につけさせることである。最後に、地理学の本質である地域の究明を押し進めると共に、地域についての新しい概念の発見に努めることである。これらの点に関しては、更に地誌学の応用と題した箇所でも詳述される。

最近では地域研究という分野、アジアなりアフリカ、ラテンアメリカの国々について政治、経済、歴史、文化、人類、言語といった様々な面に関する学際的研究が盛んになって来たが、これらの研究においても地理学が長い間、厳密性を押し進めて来た地域の概念が使われている。ただ、地理学以外の分野出身の人々にとって、地域とは精々ここ、あそこを区別する程度にしかり理解されていない面があるのも無きにしもあらずであり、地域研究の主体たりうる地理学出身者の奮闘に期待したい。また、地理学の魅力の一つは、生き生きとした世界の現実を具体的に伝えることにあると思われる。ただ、今日のような情報化時代にあっては、マスメディアが絶えず流す世

界の情勢，海外ノンフィクション物の書籍，多数の比較文化論等，地理学の強敵は数多い。しかし，それらも世界の現実の一部を切り取り，主観の入った情報が多いといえる。従って，授業なり講義では客観的な事実近づけることが望ましく，そのためにも地理学は今後も重要なのである。スペインの哲学者，オルテガの述べる如く，「学問研究が際限なく枝分れし，複雑になっていく時，それと正反対の目標を追求する学問，つまり知識の総括と単純化の作業を通じて，バランスをとる必要がある¹⁰⁾」ように思われる。地理学の目標はもろもろの事象を総合化することにあるゆえ，地理学の未来は明るいといえるのではなからうか。次に，地誌学の応用に関し，自然風土，異文化理解への貢献，*espace vécu*（生きられる空間）の概念の3点に関し，説明を加えてゆきたい。もちろん，地誌学の応用に関してはさらに様々な面が考えられるが，上記の3点は現時点での筆者の提案に過ぎない点を予めお断りしておきたい。

II 地誌学の応用

II-1 自然風土

20世紀初頭にフランスで刊行された『フランス史』の第一巻は，ヴィダル・ド・ラ・ブラージュのフランス地誌 *Tableau de la géographie de France* であり，地誌学の応用の第一は歴史の舞台となる地域の設定，叙述である。フランスにおいて地理と歴史との結びつきはかつて強かったが，フランスのアナール学派（社会経済史年報に結集する人々，筆者注）はフランス地理学者の多くよりも，より深く，忠実にヴィダルの『人文地理学原理』を学び，実践していたのは逆説的であると，Baker, A. R. H. は述べている¹¹⁾。フランスの地理学者がヴィダルの最後の著作にあまり注目しなかったことが，フランス地理学派の伝統であった地域研究の衰退にも結びつくのであろう。ここでは地誌学の応用の1つの例として，岡山県史の第1巻『自然風土』のアウトラインを検討してみたい。編集の責任者は石田 寛であるが，次のように述べている。「本書は，歴史の舞台として，この岡山の土地・自然の性格とその意義を究明するとともに，景観・環境・地域構成形成の観点から，岡山の風土の特色・意義を明らかにしようとするものである¹²⁾」。第1巻は2つの部門から成り，第I部で地理学通論的分野，地形学，気候学，歴史地理学などの分野から岡山の自然と景観・景域に着目しつつ風土の解明を行なっている。第II部は地誌的分野で，吉井川，旭川，高梁川，岡山平野といった，主に流域ごとに地域区分し，歴史的に形成された景域の真の姿を描き出している。地域の記述においては，静態地誌的方法，すなわち，地形，気候，植生・産業・集落……という順序をとらず，動態地誌的方法，つまり，その土地の最も特徴的なものを前面に大きく取り上げ，さらに歴史的深みをつけている。根底に流れる思想は人間主義の地理学，*Humanistic geography* である。人間主義の地理学の中心は，人間とその状態を究明することにある¹³⁾が，この思潮は日本でも早くから注目され，紹介もされて来た¹⁴⁾ので，ここではこれ以上言及しない。次に，地誌学の応用の第2点は異文化理解への貢献である。

II-2 異文化理解への貢献

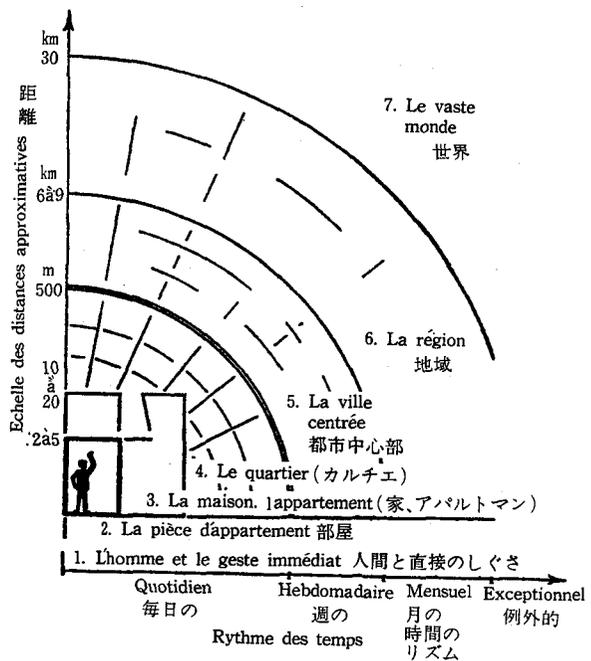
昭和58年度東京学芸大学公開講座「異文化間「またがる教育を考える」の最終回は，パネルディスカッション「海外子女教育と国際理解」であった。筆者もパネリストの一人として，「国際理解としての地理学」と題して報告し，討議に加わったことがある。報告の内容に関しては，先に述べた国際化時代の地誌学と地理教育をさらに敷衍したものであるゆえ，ここではその時にコメントで触れた点だけを記しておきたい。異文化理解に対し，地誌学からの貢献の1つは，俗説環境決

定論のあまりタブー化された「風土と人間」への考察を深めることであろう。結局のところ、人間は風土の申し子であり、長年、生まれ育った風土・環境の影響を強く受けている¹⁵⁾点に変わりはない。しかしながら、風土と人間とのかかわりを認めようとする者は多数派ではない。ともすれば「人類は皆兄弟、世界は1つ」という人道主義的理想を抱き勝ちであるが、世界の現実を直視すれば、それは残念ながら絵空事のように思われる。地誌学が世界を大きくアンゴロアメリカ、ラテンアメリカ、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、オセアニア、極地等に区分し、そこに住む人々の生活、信条、宗教、政治、経済、習俗等を究明し続けるのは、同じ人類であり、国際化時代における世界の相対的無距離化にもかかわらず、かくも世界の各地で文化が異なっている事実が大衆が驚き、それが地誌学にも逆照射され、研究を続けさせて来たのではなかろうか。その際、地誌学という名称からすぐ想起される、地球上のもろもろの事象を地域に区分して、並列的に記述してゆく学問にすぎないというイメージを脱却するためには、新しい概念の登場が必要であった。その概念こそ、人間主義の地理学が実存的現象学の照明の下で評価した *espace vécu* (生きられる空間) という概念であり、態度や知覚、環境的価値によって表現される空間についての、個人的体験の概念を評価¹⁶⁾することであった。筆者も個人を問題にする意義等に関しては、既に拙著『国際化時代の地理学』で論じたことがある¹⁷⁾。そこでの結論だけを要約すれば、抽象化された人間一般という意味での人間と風土を論ずるのではなく、具体的人間という観点での個人を問題にすることこそ、国際化時代の日本人一人一人の行動への一つの指針を、地理学からも与えようと考えたからであった¹⁸⁾。次に、問題となる *espace vécu* の概念に関し、各種の図を中心に述べてみたい。

Ⅱ-3 *espace vécu* (生きられる空間) の概念

地誌学にとって地域 *région* とは重要な概念であるが、現象学との対応から *espace vécu* (生きられる空間) が地域を考える際、研究に導入されている¹⁹⁾。生きられる空間という概念は英訳では *living space* であり、従来から使われてきた生活空間という概念と重複した面もあるが、現象学に立脚した点が新しい意味内容を加え、生きられる空間という、一見おかしな訳語にされたのであろう。生きられる空間があれば、生きられない空間があるはずであるが、後者は果たしてどういう意味を持つのであろうか。デカルトの有名な「我思う、故に我あり」の哲学を否定する現象学はフッサールにつづいて、メルロ＝ポンティを中心に進められてきた²⁰⁾が、*espace vécu*、生きられる空間という概念は、日本の哲学者が先に紹介し、命名したようである。こ

図1 Fig. I.—Les coquilles de l'homme (d'après Moles et Rohmer)
人間の殻、自分だけの世界



A. Frémont 「La région, espace vécu」 P. U. F. p. 24 より転載

ここでは、明治大学公開文化講座をまとめた著書『文化・空間』の中にある、市川 浩の「生きられる空間²¹⁾」をまず取り上げてみたい。

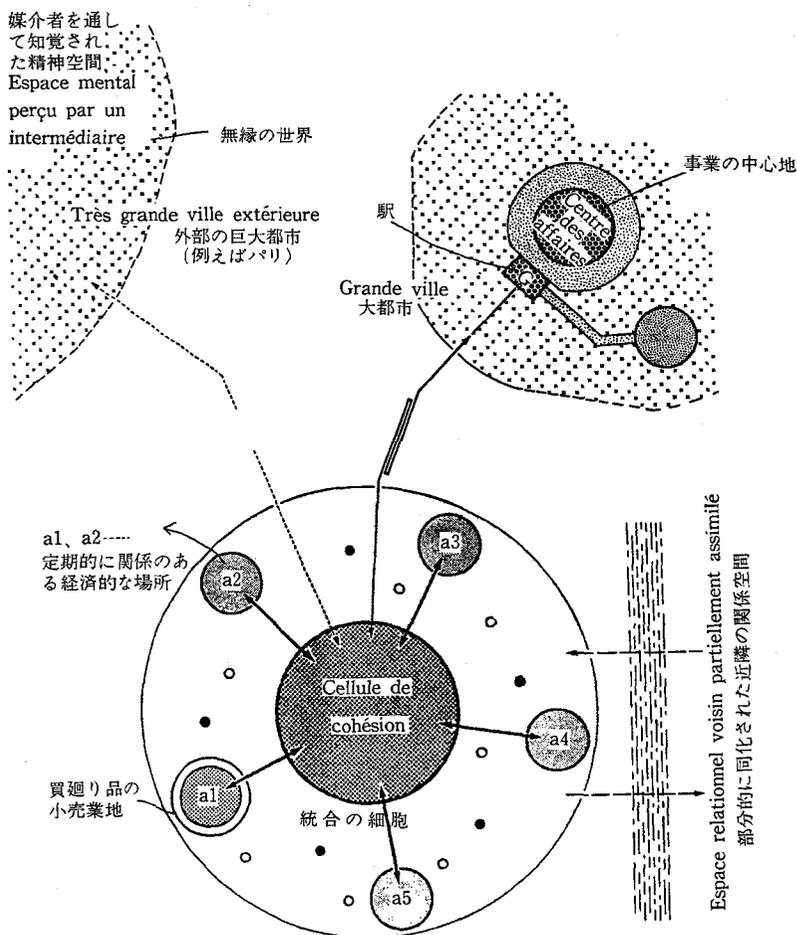
市川は、われわれが具体的に生きている空間の構造を考察している。生きられる空間の原点にあるものを、よく使われる「身体」ではなく「身」という言葉であらわしている。例えば、「世間の冷たい風が身にしみる」とか、「身をもって示す」とかの身である。いまここに身があるということによって、ここがあり、あそこがある。へだたりが生きられ、生きられる空間となると説明する。

次に、A. フレモンの著書『地域、生きられる空間』に引用されていた図を中心に、個人の知覚上の地域、世界というものを説明してみたい。図1は人間の殻、自分だけの世界を表わしたものであるが、左下を中心に90度で同心円状に距離が記されている。まず、縦軸の方を見ると、直立した人間の立っ

ている空間はせいぜい2 mから5 mまでのことがわかる。次に、10mから20mまでが家の空間である。半径500 mまでになると、カルチュエ、町となる。その後、30 km 圏までが知覚上の地域となる。次に、横軸を見ると、時間のリズムに応じた人間の行動が示されている。すなわち、毎日の単位は500 m程度、週の単位で6 km から9 km、地域は月の単位であらわされている。もちろん、日本でのように職場と家が遠く遠れていると、距離、時間のリズムとも当てはまらないが、考える上での一応の目安になる。

別の例を挙げると、山川菊栄は『わ

図2 L'ESPACE VÉCU DES PAYSANS VERS 1890-1950
1890~1950年頃の農民の生きられる空間



(R. Schwab 原図)

が住む村』の中で、「あるおばあさんは同じ部落の中で嫁入りし、その近郊の雑木山と田畑を相手に一生暮して、九十近い今まで、ほとんど部落よりほかに一步を出ずに暮してきたような人です²²⁾」と述べているが、このおばあさんの生きられる空間は極めて小さかったことがわかる。最後に、ロラン・シュワブの国家博士論文から、1890～1950年頃の農民、都市に住む女性家事従事者、工場通勤労働者の生きられる空間の図を入れておきたい²³⁾。いずれも、いかに狭い範囲、孤立した細胞的空間の中で、農民、他の人びとが働き、物を購入していたかが理解されよう。人づてに聞くパリのような巨大都市は、人びとにとって所詮無縁の世界だったのである。

III 結 び

本稿を結ぶにあたり、地誌学の応用とは一体何んであるか、以上の論議を基に

まとめてみたい。一言でいえば、それは地域整備政策と地域計画政策への指針を与えることにある²⁴⁾のではなからうか。しかしながら、地理学研究の一般的傾向は、フィールドワーク(実態調査)を中心にした基礎的研究にある点は、よく知られた事実である。現在でも、プランナーや行政にたずさわる人々は、地理学の扱う対象を地理とも思わず、また優れた地理学の研究成果も知らずに具体的な仕事を進めている。地理学研究者は基礎研究を押し進め、その成果をあまり世間にアピールしないために、その成果は経済学者、政治学者、工学者を始めとする人々が応用することになる²⁵⁾。そのため、地理学の存在そのもの、地理学者の活躍等が十分に知られずに終ることも生じてくる。もちろん、具体的な問題、例えば何かの立地問題の解決策を依頼されたとしても。その際、地理学研究者の得意とする実態調査がまず行われることが重要であるが、その前

図3 L'ESPACE VÉCU DU PERSONNEL DOMESTIQUE FÉMININ DANS LES VILLES VERS 1890-1950
1890～1950年頃都市に住む女性家事従事者の生きられる空間

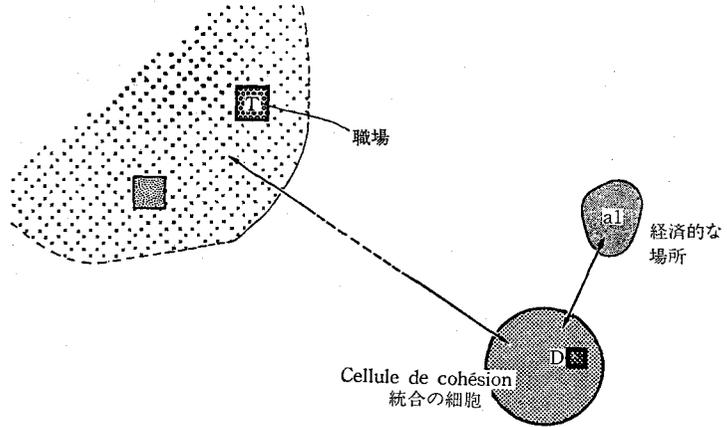
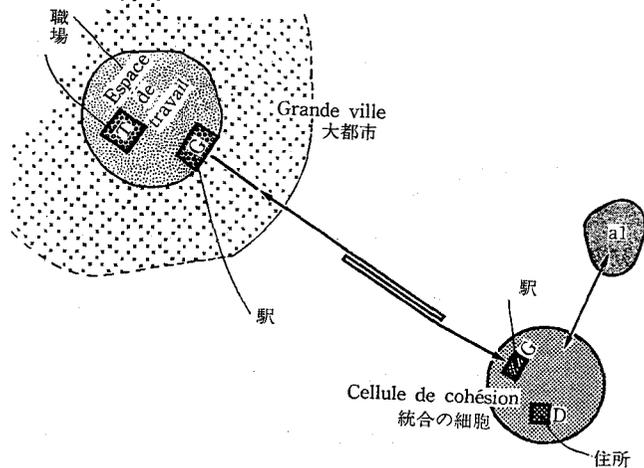


図4 L'ESPACE VÉCU DES OUVRIERS PENDULAIRES DE L'INDUSTRIE VERS 1890-1950
工場通勤労働者の生きられる空間



(R. Schwab 原図)

にその地域がどのような土地であるか、第一に知る必要がある。従って、地誌学書は地理学研究の一層の細分化・専門化にもかかわらず必要と思われる。今後、地理学は地誌学をも含め、マスメディア、旅行業者、観光産業等にも新たな市場を求め、学校地理だけのイメージを変えていかなければならないだろう。価値観の多様化した今日において、地理学が学問体系として生き残るためにも、地理学者は能力をある程度商品化する必要に迫られるであろう。というのも、国際化時代にあつて世界の現実を明らかにし続ける学問の1つ、地理学への需要・期待は今後一層増大するものと思われ、それに地理学者が応えなければ、地理学の存在理由はますますあやういものとなろうからである。

本稿は、新潟県社会科資料活用研修会での講演『地誌学とその応用』（昭和59年2月17日、於県教職員互助会館「高陽荘」）内容を骨子に、これまでの筆者の地誌学的研究の反省と今後の研究展望について、内外の文献を参照しつつ取りまとめたものである。

注および参考文献

- 1) R. Brunet 「Pour une théorie de la géographie régionale」(Mélanges offerts à A. Meynier 「La pensée géographique française contemporaine」 Saint-Brieuc, 1972) 650頁
- 2) 大嶽幸彦「国際化時代の地理学」, 大明堂, 1980, 18~19頁
- 3) 田辺健一「地誌の効用」, 出版ダイジェスト第1070号, 1983
- 4) 矢澤大二編「三澤勝衛著作集3, 風土論Ⅱ」, みすず書房, 1979, 239頁
- 5) 西川 治「人文地理学の特質」(西川・河辺・田辺編「地理学と教養」, 古今書院, 1971) 189頁
- 6) 正井泰夫「日米都市の比較研究」, 古今書院, 1977, 9頁
- 7) H. Nonn et J. C. Boyer 「L'analyse régionale dans la géographie française: 1972-1979」(Comité national français de géographie éd. 「Recherches géographiques en France」, Tokyo, Paris, 1980) 174頁
- 8) 森川 洋「ドイツ地誌学の最近の研究動向」(石田 寛教授退官記念事業会編「地域——その文化と自然」, 福武書店, 1982) 502頁
- 9) 大嶽幸彦「国際理解としての地理学序説」(大嶽・二木編著「国際理解としての地理学」, 大明堂, 1983) 3~5頁
- 10) ホセ・オルテガ・イ・ガセット(木庭 宏訳)「大学の課題」, 神戸大学近代発行会, 近代58号, 1982, 81頁
- 11) A. R. H. Baker 「On the Relations of Historical Geography and the Annales School of History」(谷岡・浮田編「歴史地理学プロシーディングス」, 古今書院, 1982) 321頁
- 12) 石田寛監修「岡山県史, 第一巻自然風土」岡山県史編纂室編, 1983, 2頁
管見によれば奈良県史の第1巻も地理にあてている。藤田佳久編「奈良県史, 第一巻地理」名著出版, 1984
- 13) Yi-Fu Tuan 「Humanistic geography」 A. A. A. G. 66-2, 1976, 266~276頁

- 14) 竹内啓一「主観の地理学からの逆照射」一橋論叢81-6, 1978, 2頁
山野正彦「空間構造の人文主義的解説法」人文地理31-1, 1979, 57~59頁
高野史男「現代人文地理学の三つの潮流とその統合」立正大学『文学部論叢』第76号, 1983, 1~12頁
- 15) 関口 武「風土のよこがお」, 古今書院, 1976, 1頁
- 16) A. L. Sanguin「La géographie humaniste ou l'approche phénoménologique des lieux, des paysages et des espaces」Ann. de Géogr. 501, 1981, 560~587頁
- 17) 前掲2) 107~114頁
- 18) 大嶽幸彦「幕末前後における二人の先覚者の地理思想——吉田松陰と 福沢諭吉の旅行記を中心に」歴史地理学第122号, 1983, 15頁
- 19) 例えば, A. Frémont「La région, espace vécu」P. U. F., 1976, 全224頁
青木伸好「地域研究における哲学の影響とその問題」人文地理34-6, 1982, 51~70頁等を参照されたい。
- 20) 水津一朗「地域の構造」大明堂, 1982, 12頁
- 21) 市川 浩「生きられる空間」(明治大学人文科学研究所, 公開文化講座Ⅲ, 「文化・空間」, 風間書房, 1983) 281~310頁
- 22) 山川菊栄「わが住む村」, 岩波文庫, 1983, 55頁
- 23) R. Schwab「De la cellule rurale à la région, L' Alsace, 1825~1960」Paris, 1980, 全518頁
- 24) エチエンヌ・ジュイヤール著・大嶽幸彦訳「ヨーロッパの南北軸」地人書房, 1977, 日本の読者への文中
- 25) ヴィクトール・プレボ著・大嶽幸彦訳「地理学は何に役立つか」大明堂, 1984, 5頁にも同様の指摘がある。

A Point of View on Regional Geography

Yukihiko OHDAKE

ABSTRACT

It is not so easy to define the field of regional geography, but its aim can be indicated to learn the human life, climate, landform and various industries on a certain land. In Japan, the research of general geography is progressed and extremely specialized. On the contrary, the research of regional geography is not accepted in a kindly meaning. There are many geographers in the world, whose life works are to write the regional geography such as the French School.

By the way, many people have the curiosity to know unfamiliar lands even if they don't understand the geography. The reasons are as follows: 1) A country exists in relation with another countries; 2) The opportunity to go abroad has been everyday affairs and popularized; 3) The business works in foreign countries are spreading even for the employees of minor enterprises. Therefore, the following points should be learned in regional geography: 1) Various kinds of value judgements exist in the world, and have their own value systems; 2) We must acquire the sense of a cosmopolitan; 3) The research on the concept of region is required to be more deepened.

As concerns the application of regional geography, the next three points of view are proposed. Firstly, regional geography is necessary for the geographers of natural features to know the landscape, the environment and the components of region.

Secondly, regional geography is able to contribute to the understanding of different cultures. As it is said that human being is a God-sent child of the natural features, the effect of the environment to mankind cannot be denied even in the age of internationalization.

Thirdly, the concept of *espace vécu* is effective to the reflection on region. *Espace vécu* is the product of phenomenology and can be defined by the man's sphere of daily activity in consideration of the distance and the time of one person.

In conclusion, regional geography is utilized in different fields and relates to the various phenomena of the region.

KEY WORDS

Regional geography

地誌学

Region

地域

Value systems

価値体系

Espace vécu

生きられる空間

Application

応用